■今月の特選句

2020 年10月

成績の悪し糸瓜の骨密度

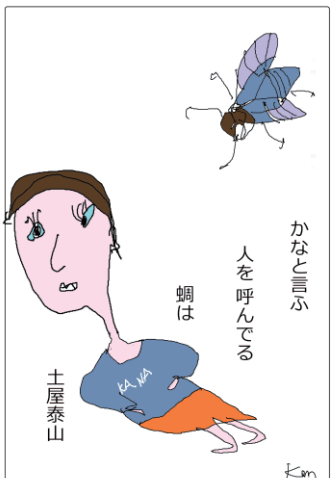
花岡直樹

へちまの実の内部は強靭な繊維質で、タワシや靴の中敷に使われるが、骨密度としては成績が悪い。なるほどね。多少強引だが納得だ。

捕虫網何か求めて空を切る

稲沢進一

「空を切る」とは空振りのこと。何か求めてもつかめないもどかしさ。空振りの補虫網ということだけで一句に仕上げて見事である。



かなと言ふ人を呼んでる蜩は

土屋泰山

蜩の鳴き声は、「かな」という人を呼んでいたんだね。「かな」が人名だとした俳句は初めて見た。こんな句を見ると嬉しくなるねえ。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の特選句

2020 年10月

生き方を変えたか花器の枯芒

上山美穂

枯れ芒は晩秋の高原にこそお似合いである。ところが思いがけず花器に活けられて、これが「サマ」になっている。枯れ芒も第二の人生に満足。

マスクメロン食って感染予防する

荒井　類

日本でコロナの感染者が少ないことの理由の一つがマスク着用の徹底らしい。感染予防になる食べ物と言えば、やはりこれでしょうね。

大夕焼熟れたる色をしてゐたり

桑田愛子

俳句は感動の風景を文字化することが基本。夕焼けの色をチャートの色名で表現してもつまらない熟れた色として成功したね。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の秀逸句　（・・・七七をつけてみました）

鉄よりも硬い田舎の新豆腐　伊藤浩睦
・・・ダイヤモンドの入れ歯で齧る

学校の蛇口も一緒に休暇明　稲葉純子
・・・久しぶりねの声のジャージャー

下駄箱に下駄がない令和の夏　鈴木和枝
・・・靴箱ならぬずつと下駄箱

金杯より新酒が好きと百歳翁　髙橋きのこ
・・・そりやあそうだわ金杯じや酔へぬ

台風来備えの万全空振りに　田中晴美
・・・試験のヤマが外れたやうな

白球を追ふ秋風と外野手と　月城花風
・・・さはやかなるを絵に描いたよな

かなかなのやうな小言にうんざりす　田村米生
・・・小言のやうなかなかなもをり

鵙の贄（ニエ）私も時々物忘れ　岡田廣江
・・・自覚あるならまだいい方よ

鈴虫の透明な朝鳴らしけり　工藤泰子
・・・がちやがちやならば濁りの朝か

殺生せぬ寺の厨に蟻の列　石塚柚彩
・・・列の先には砂糖の壺か

吾と共に嫌はれ者よ大西日　田中早苗
・・・感謝の二文字汝と西日に

生き様を観てくれまいか法師蝉　田中　勇
・・・七年間も地中に我慢

台風来回転のこぎりの形して　日根野聖子
・・・日本列島輪切りにせむと

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の滑稽句

＊今月の特選句･秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

大西日寺も小僧も灼き尽くす	相原共良
コロナ禍を笑い飛ばして鴨足草	相原共良
地下街の涼しき処ここが密	相原共良
うそ寒し髪の毛余命減るばかり	青木輝子
残る蚊にストーカーされ寝そびれる	青木輝子
歩から金庶民派さんま出世する	青木輝子
日本語しか解らぬ男蝉時雨	赤瀬川至安
秋の蝉挙句の果の空を飛ぶ	赤瀬川至安
空はゴロゴロ森はかなかな夕闌くる	赤瀬川至安
秋風やコロナとともに生きてゆく	荒井　類
ピカソなら色なき風をどう描くや	荒井　類
蚯蚓鳴く大邸宅の木の下で	井口夏子
満月を愛でる心も満月なり	井口夏子
きちきちのフレンド連れて二段跳び	井口夏子
打寄する波の進物海は泣く	池田亮二
熱帯夜唸るは鼾かクーラーか	池田亮二
コロナの世祖父母締め出す運動会	石塚柚彩
飛蚊症または小蝿の来攻か	石塚柚彩
秋さらりサラダさらさら皿に盛る	泉　宗鶴
秋深し黄泉まで読み解く推理眼	泉　宗鶴
秋に飽き飽くなく続く世迷言	泉　宗鶴
四十度越えても残暑不合理な	伊藤浩睦
星月夜岐山と祁山取り違え	伊藤浩睦
秋の風どこ吹く風と云はれても	稲沢進一
行き先は誰にも告げず秋の蜂	稲沢進一
盗み酒したのだらうか酔芙蓉	稲葉純子
大股や小股が走る秋麗	稲葉純子
極暑とて地獄はさらに暑かろう	井野ひろみ
冷房を目差し銀行立ち寄りて	井野ひろみ
全員がマスクの車両月今宵	井野ひろみ
台風もコロナも知らねばただの朝	上山美穂
スッピンに白粉花を仕事終え	上山美穂
鰯雲出番を待つや空のそで	梅野光子
窓を開ければ虫のコーラス夜の目覚め	梅野光子
秋色の服久々の買い物に	梅野光子
頭より脚で稼げと残暑かな	遠藤真太郎
地獄でも熱を測ると死人花	遠藤真太郎
高齢にあらずシルバー鳥兜	遠藤真太郎

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事･写真･イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写･転載等を禁じます。

検温を受けてより入る晩夏かな	大林和代
頭のなかは燃えかすだらけ熱帯夜	大林和代
鼓笛隊笛吹くごとし鶏頭花	大林和代
夕暮れが早まる処暑を急ぐかな	小笠原満喜恵
母よりも重ねて数多盆の月	小笠原満喜恵
我が身より暑さを心配蘭の花	小笠原満喜恵
露草の水玉は露吹かれゐる	岡田廣江
ひとつの季語で別の景色や冷やかも	岡田廣江
閑古鳥人・ゴミ・カラス寄せ付けず	加藤潤子
炎天下冷や水となる庭仕事	加藤潤子
涼風に頬赤らめる更年期	加藤潤子
ステイホーム大欠伸してなにもせず	金城正則
古書店の扇風機の音ガタガタ	金城正則
お恵さんの別れの歌を聞く秋	金城正則
初秋やちりめんじゃこの目玉混ぜ	久我正明
お祭りはどこも自粛や蚯蚓鳴く	久我正明
手に値札頭の上にサングラス	久我正明
落蝉のからから風の真ん中に	工藤泰子
鎌掲ぐ草の中なるいぼむしり	工藤泰子
玉留めの尻尾を揺らし秋の風	桑田愛子
龍の眼の澄み渡りたる水の秋	桑田愛子
蝉の穴ミステリアスなにほひさせ	小林英昭
ほうたるに渡す三途の渡し賃	小林英昭
落し文思ふひとには拾はれず	小林英昭
コロナ禍になかなか来ない麒麟かな	佐野萬里子
モロヘイヤ災禍乗り切るねばりかな	佐野萬里子
熱中症新型コロナと拮抗し	佐野萬里子
汗つかきの御居処に吸ひ付く便座かな	壽命秀次
炎天を来て袴下まで一気脱ぎ	壽命秀次
紐ビキニの腹に巻き付く肉浮き輪	壽命秀次
人待ちの人目はばかるサングラス	白井道義
ひとしきり狸寝入りや生身魂	白井道義
近道は袋小路や玉の汗	白井道義
皿に桃残したままの原爆忌	鈴鹿洋子
姑の扇シャネルの香を放つ	鈴鹿洋子
一日三回「ごはんだよ～」老夫婦	鈴木和枝
風鈴や団扇のあった頃は母もいた	鈴木和枝

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

良寛のような案山子や雀くる	髙田敏男
鰯雲肴にすれば昼の酒	髙田敏男
空港にジャンボジェットや鳥威	髙田敏男
泳ぎても締まらぬ下腹魚見よ	高橋きのこ
端居するテラスは熱風吹き溜まり	高橋きのこ
盗人萩開き直りて咲き誇り	竹下和宏
大野分野の無き都市に八つ当たり	竹下和宏
颱風来スマホ落としただけなのに	竹下和宏
路地裏へ煙吐き出されて初秋	龍田珠美
閉園の伝言板や秋の蝉	龍田珠美
桃食らう太宰の横は美女ばかり	龍田珠美
立秋やギックリ腰にしゃがみ込む	田中　勇
盆踊一人またひとり去るなり	田中　勇
夏を病む夫に書きやるラブレター	田中早苗
発熱は九度九分蟆（ぶよ）に負けました	田中早苗
二の腕を見せた夏服さようなら	田中晴美
冷麺に飽きず一昨日昨日今日	田中晴美
不倫などしてみたかった蝉時雨	谷本　宴
秋刀魚食ふ小津安次郎味はひて	谷本　宴
高級魚?さんまの尻は落ち着かず	谷本　宴
ひまわりのコロナに見ゆるテレビかな	田村米生
甘藷食べ放屁で予防するコロナ	田村米生
音もなく目方の増ゆる食の秋	月城花風
吾と目を合はせ抗議す蜻蛉かな	月城花風
コロナにも案山子のほしや嬶大笑（かかたいしょう）	土屋泰山
遠くから秋蝉の声浪花節	土屋泰山
雷鳴の遅れを数え孫安堵	長井知則
暑の峠越えたと知らすつくつくと	長井知則
寄らば斬る血染めの空の二日月	長井知則
守武忌バイトの巫女の付け睫毛	西をさむ
夢二忌やをんなは背で歩むもの	西をさむ
コオロギのコロナに泣くや永田町	西をさむ
秋刀魚には不要不急よダイエット	花岡直樹
つけたままビールを飲めるマスク欲し	花岡直樹
墓洗ひ了へどしゃぶりの雨に遇ふ	久松久子
煉瓦道パズル遊びの蟻二匹	久松久子
コロナ菌夏越の祓ひ効き目なし	久松久子
閉店の文字の小さく八月尽	日根野聖子
赤まんまデジタルの世を生ききれず	日根野聖子

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

コロナ禍に御魂とまどふ盆の月	廣田弘子
姥桜マスクの息でうるほされ	廣田弘子
人間の愚行の極み原爆忌	廣田弘子
温度計体温計と化す暑さ	藤森荘吉
言はなくていいのに暑い暑さ哉	藤森荘吉
生産性涼んだ後で考へる	藤森荘吉
夏マスク咽せるし蒸れるし息苦し	細川岩男
GOTOと夏旅煽る空しさよ	細川岩男
居座りし梅雨前線頑固者	細川岩男
ペイペイでペイする大き西瓜かな	南とんぼ
御蔵ならぬ庫内に入れるオクラかな	南とんぼ
秋刀魚待つ細身の皿を用意して	南とんぼ
無縁墓血縁装ふ彼岸花	峰崎成規
貪欲の懺悔語りし鯊の口	峰崎成規
灯下親しルビへ擦り寄る天眼鏡	峰崎成規
夕月夜ぜんまい仕掛けの大阪に	椋本望生
陰性のうちに済まさう水喧嘩	椋本望生
仮面取る涼しき距離を保ちつつ	椋本望生
叶わぬも舁き手こらえる秋祭り	向田将央
敗戦の涙は三日月だけに見せ	向田将央
カマキリに威嚇の技を学びたい	向田将央
サングラスかけて淑女の顔となり	村松道夫
人工の雲のさばるや原爆忌	村松道夫
恐れ入る四十一度の残暑かな	村松道夫
句会とて年上ばかり秋暑し	村山好昭
三歩程前行く妻や秋落暉	村山好昭
秋立つといへど今朝ほど三十度	村山好昭
自ずからあらざる平和法師蝉	百千草
くわりん灯る夜の何処かに迷はぬやう	百千草
分け入りて出口失ふ真葛原	百千草
秋の虫どれも草むらの主人公	森岡香代子
街灯に喰らひつきたる鬼やんま	森岡香代子
秋のバラ疲労の色をしてをりぬ	森岡香代子
望遠で覗けば銀河の星増える	八木　健
水澄めば魚は影となり奔る	八木　健
硬いほど酸つぱいんだレモンつて	八木　健
全員に秋の初風プレゼント	八塚一青
今日死んだ虫に捧げる挽歌かな	八塚一青
馬肥ゆる恋わずらいも知らぬまま	八塚一青

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

蛸足に蛸足からむ盆踊り	柳　紅生
きつね色たぬき色なり日焼の子	柳　紅生
判官は水のしたたる菊人形	柳　紅生
困ったな発句の出来ぬ盆の入り	柳澤京子
まか不思議頭上に広がる蝉の声	柳澤京子
猛暑にて外出禁止籠の鳥	柳澤京子
一合の約束反故に鰍（かじか）酒	柳村光寛
蟷螂にちょっかい出して深傷負い	柳村光寛
星月夜戦場ヶ原にシャッター音	柳村光寛
バスルームに幽霊の影夫の留守	山内　更
防犯か監視かカメラ付く残暑	山内　更
エアコンを切るタイミング虫の声	山内　更
台風の風収まらず吹き返し	山岡純子
秋の蝉いつしか声の寂しくて	山岡純子
草ひばり鈴の音を聴く寝床かな	山岡純子
刈田跡あまた集える宴かな	山下正純
天空に星火（せいか）吐き出すペルセウス	山下正純
蝉しぐれ時の息吹をいただけり	山下正純
「かかし村」に人真似をして案山子らは	山田真佐子
震度七震災の日の体験車	山田真佐子
敬老日自分のことと自覚せず	山田真佐子
フロアに煙を吐くは蚊遣り豚	山本　賜
夏休みもう終る子に見えない子	山本　賜
岡本太郎の壁画もびっくりこんな夏	山本　賜
トカゲの子左右確認姿消す	横山洋子
爺婆のシンプルベスト冷奴	横山洋子
終業の曲の変はれば涼新た	横山洋子
強情の面の皮して秋茄子	吉川正紀子
夜更しの友煎餅と秋の虫	吉川正紀子
焼酎でコロナを責める暑気払い	吉川正紀子
新酒の二合は多し二合飲む	吉原瑞雲
裾乱し禰宜の小走る秋まつり	吉原瑞雲
目貼りして入れぬ心算の病魔かな	吉原瑞雲
筋トレのビデオ山積み秋暑し	渡部美香
封切れば「選外」の文字大くさめ	渡部美香
秋の空泣くだけ泣いてオムライス	渡部美香
髭もじやの衣問ふまい衣被	和田のり子
衣下のつぺらぼうの衣被	和田のり子
強盗も花柄マスクしてをりぬ	和田のり子

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。